
創造神記

した

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造神記

【Nコード】

N9713U

【作者名】

した

【あらすじ】

高校生、三沢瞬は夏休みも近づいた7月の放課後、土砂降りの中見たこともない化け物と戦う三人の人間と出会う。事実の奇妙さを受け入れる前に、自身が無関係な人間でなくなっていることを自覚していく。

不思議な世界に踏み込んでいった彼が手にした力は――

始まりは終わりから（前書き）

未来はもうないのかもしれない。

押し付けたくはないと思っています。

どうしてこんなことをしなければいけないのでしょうか。

押し付けたくはないのです。

神様なんてシステムを、なんで作ってしまったのでしょうか。
人が作ってしまったのでしょうか。

始まりは終わりから

静寂の中、一人が話しかけた。

「時間です。」

「そうですか…」

それより高い声が答えた。

「続けることはできないんですか。私が、続けることは。」

高い声は続けた。先ほどとは別の、声が返答した。

「自身で感じておられるでしょうか？限界であると。」

それ以上静寂を破るものは現れなかった。

三つの物体は影すらない。

「わかりました。ただ、だれも不幸にならないように。」

だれも同意する者はいなかった、不可能だった。

「いえ、それは無理かもしれませんがね。できる限り、涙を流す人が
少なくあるように、努力をしましょう。」

「では」

「前代が作り上げたシステムを改変します。…死ぬのは私一人です。」

土砂降り、こんにちは

制服の学生が、土砂降りの中自転車で自然公園を駆け抜けている。時刻は6時半。公園に取り付けられた街灯より頭一つ大きな時計が時刻を示している。

制服はこの公園近くの私立高校のものだ。

まくりあげられたYシャツの左腕に、その高校を表す筆記体風「k」の文字が刺繍されていた。

ズボンの色はグレー。性別は男。

外見に特徴はない。ただ、不運に出会った顔をしていた。

天気予報では一日晴れのはずだった。

夏休みも近くなる中、平常時より早い授業を終え、親しい友人と近くで遊ぶ。

いたって普通の、少し勉強しない高校生活の一日。

友人と遊ぶのに邪魔で置いていった自転車を学校へ取りに戻り、自宅へ向かう途中だった。

ところがこの森林公園に差し掛かってからにわかには曇りだし、最初はぽつぽつと、次第に土砂降りとなって雨が降り始めた。楽しかった一日が、ちよつとだけ台無しになった帰り道。

傘も持たぬまま少しでも濡れまいと自宅へ急ぐ。

時折雷がなり、遠くで空が光る。

強い水の粒が体を冷やしていく。

「落ちたり…しないよな？」

間近まで音が迫る。

度々テレビで見る落雷映像を思い出し、体が冷えたこととは別に身

震いした。

ペダルに一層の力を込める

。

森林公園は中々に大きい。

それひとつでランニングコースになるほどの大きさで、そこをほぼ突っ切る形で自転車は進んでいく。

一般道を回り込んで帰宅するよりはよっぽど早い、薄暗く人影もなく等間隔で街灯だけが並ぶ道は、不安を煽るには十分だった。

さらに雷の音は近づく。光と音にほとんど差がない。

雷の光に合わせて、フラッシュバックのように思い出される雷。

『雷落ちませんように、落ちませんように、落ちませんように……！』
もはや念仏のように唱えるだけだ。

雨が止むのが先か、家に着くのが先か。後者の方が早そうだった。
その時、

バリバリバリッ！！

「ひっ！？」

凄まじい音と主に彼の横の街路樹に雷が落ちた。

驚きのあまりバランスを崩し、自転車ごと水の溜まったコンクリート道路に転げ落ちる。

水しぶきがあがり、タイヤは空転し、彼の横に倒れる。

体の右半分がすっかり濡れてしまっていることに気付く余裕もない。

後輪の空転音がおさまった頃、ようやく平静を鳥戻り、現状を確認した。

落雷現場は距離にして3メートルほど。

まだ恐怖心が残っているのか、右手の指にビリビリと震えるような感覚が残っている。

自転車は無事。制服は

「気持ちわる……」

見事にびしょ濡れだった。

もう少して公園を抜けるところだった。

公園を出た先には高い建物が多くない。タイミングが少しずれていれば、死んでいたかもしれない。危なかった。

「危なかったな……」

死の危険があったとは思えないほど、落ち着いていた。友人達との会話のネタにでもなるとすら考えていた。

これが笑いごとでも、話のネタでもなく、命の危機ですらなかったことにまだ彼は気づいていない。

この森林公園の中に三人の人間と一つのバケモノがいたことも。

自転車を持ち上げる彼の耳に、爆発音が聞こえた。

不思議、はじめまして（前書き）

自転車を持ち上げる彼の耳に、爆発音が聞こえた。

雷が落ちたところよりは遠くの、しかしおそらくこの公園内からする音。

命の危機などそうそう遭遇したことのない高校生が、アクションもののドラマや映画で聞いたような音。正確には爆発音かは分からない。

「なんだ…？」

音は断続的に聞こえているが、原因は見えない。それが彼の野次馬心を刺激する。

音のする方へと、自転車を押し進めた。

不思議、はじめまして

自転車押す少年が進む歩道の横、雑木林を抜けたさらにその先にある道路で、3人の人間が一体の化け物と交戦していた。

少女が二人、少年が一人。

一人は少女は胸のあたりまでの黒髪を靡かせ、小走りで化け物に近づく。靡いた髪の間、首筋にあざのような跡が見えた。

もう一人の少女は頭の下の方で髪を二つに結び、少し化け物と離れた所で直立し、化け物の動きを伺っている。こめかみのあたりに同じようなあざを確認できた。

直立した少女のさらに後ろ、メガネをかけた、真面目そうな印象を与える短髪の少年が二人の様子を見ていた。右腕には黒くて少々ゴツイ、時計屋などではよく見かける高機能時計がはめられていた。

3人とも、それぞれ違った雰囲気を持った制服姿だった。

化け物は高さが人の5倍ほど、泥が集まったような外見で、知能を持っているとは思えない。

動くものに反応し、触手のような、腕のような日本の突出物を振り回す。

小走りで化け物に近づいていった少女に、反応して、腕を振り下ろす。

その時、立ち止まっていた少女が動いた。片手を頭に添えるようにして、一度瞬きに、叫ぶ。

「凍れ！」

瞬間、先ほどまで降下運動をしていた腕は凍りつき、その動きを止めた。

すかさず、近づいていった少女が地面を蹴る。その跳躍力は人間のそれを軽く超えていた。

「砕けるおー！！」

2メートルほど軽く飛び上がった少女は、凍ったその腕猛烈な力で

蹴り飛ばす。

腕は碎けて、地面に落ちる前に、消えた。

「千明、倒せる！この調子で続けて」

「了解」

化け物が動き出す中で声を掛け合い、タイミングをはかりなおす。

二人の連携プレーを見つめているだけの少年のそのまた後ろで、物音がする。

少年が振り返るが早いのか、後ろの人物が口を開いた。

「なんだよ、これ…」

音のする方へと進んでいた少年は、雑木林を抜けて一つ横の道へと出た。そして、呆然とした。

「なんだよ、これ…」

動揺と驚きの言葉の後、二の句を告げることができない。

彼の目の前に広がっているのは、10メートル近い化け物と、それと戦う2人の少女の姿、それを見ているだけの少年の姿であった。

化け物はこの世のものとは思えない、水分を多く含んでいそうな姿だった。

3メートルほど前にいた、自分を見て立ち尽くしたままだった少年が急に驚きから緊張へと表情を変えた。

その変化に気づきかけた瞬間、その少年は既に彼の目の前にいた。

「え？」

次の瞬間には、今度は彼も少年と共に20メートルほど離れた所に来ていた。

時差でぽつんと残された自転車が倒れ、音を立てた。

「どうしたの、源田！？」

「よく分からない！ただ、無関係な一般人が巻き込まれた可能性があるある…！」

先ほど「千明」と呼ばれていた少女が、少年に問いかけ、少年は答

えた。

同年代の少年に「一般人」と呼ばれるのはなんだか違和感を感じた。「僕らみたいな人以外にアレは手を出さないはずだから多分大丈夫だと思うんだけど…なんかあったら大声で呼んで。」

「は？え？あ、おい！ちよつと！！」

彼の声には答えず、少年は再び元いた場所へとまたたく間に戻った。「なんなんだよ…これ…」

彼はその場に取り残されてしまった。

前方では未だに少女たちが戦いを続けている。

少年は見つめているだけだ。

孤独感の中で、少しずつ冷静さを取り戻した彼は考えた。そして思い至る。

先ほどの少年が言った通り、目の前で戦っている少年少女たちのような人物にだけ攻撃をしかけるのなら、少年が自分の元を離れたのにも納得がいく。

あの少年が自分の近くにいたら、攻撃がここまで及ぶかもしれない。「無関係な一般人」を巻き込まないためなのだろう。

しかし、なぜ少年は化け物と交戦しないのか。

見る限り、あの少女達と敵同士ではないようだし、むしろ信頼関係さえうかがえる。そして自分を「無関係の一般人」と呼称するあたり、少女達と同じ領域の人間なのだろう。

そうすると、不思議な力を持っているようだ。不思議な力…正体は分からないが明らかに人のもつものではない。

あの、瞬間移動のようなものが、少年の力なのだろうか…？

存外落ち着いた脳でそんなことを考えていると、一つの衝撃が彼の集中を解いた。

バリバリバリッー！！！！

先ほど経験した、あの、大きな雷だ。しかし、今度は彼の近く、1

メートルほどの位置に落ちた。

地面の水たまりに、電撃の余韻がただよっている。

普通なら、雷は進路をそれ、彼に直撃してもおかしくない。普通なら。

「なっ、」

なんでまた、と叫びそうになった時、もう他の声が響いた。

「やばい！そっちに行く！！」

彼が慌てて顔を前方に向けると、化け物がこちらに進路を変えていた。雷の衝撃でこちらの存在に気づいたのだろう。

少女達が止めにかかるが、化け物は進路を変えることはない。彼の元へと近づく。

少年は理由が分からず、動けずにいる。

動くことすらままならない。

恐怖。

焦燥。

恐怖。

疑問。

なぜ、あの化け物は自分の元へ襲いかかる？

無関係な一般人を襲うことはない、ではなかったのか？

何故？

何故自分はこんな目に？

ただの高校生がこんな目に？

―ただの？

もし自分が「無関係な一般人ではなかった」のだとしたら？
自分があの、不思議な力を持っていたとしたら？

少年は信じることにした。

彼の体に、雷が落ちた。

バリバリバリッー！！！！！！

今日三度目の雷が森林公園に落ちた、生身の人間のもとに。ただ、その人間は、黒こげになるわけでも、倒れるわけでもなかった。

瞳に強い光をたたえ、落ちた雷の電撃を身にまとっている。その力は、無関係な一般人のそれではない。

戸惑うことなく、彼は右手を前方へと向ける。指差し確認をするように伸ばした人差し指を、化け物の方角へ向けて。のびた人差し指の爪、少女達の体にあつたような小さなあざがあった。

落ち着いた彼の、化け物の方角へ向けられた指から、凄まじい電撃が飛んだ。

一瞬だった。彼の手から飛ばされた電撃は化け物を包んだ。元々水分の多そうなそれは一瞬その大きな体をくねらせると、腕と同じように消えた。

彼は化け物が消滅した後、体の緊張を解いた。

「今のつてなんなんだ……」と力についてか化け物についてか、はたまたその両方かに、独りごちた。その表情は先ほどまでとは違う、普通の高校生のそれだった。

沈黙の後、呆然としたままだった3人の中、少年が動いた。

腕にしていた高機能時計を外しながら、新たな仲間へ声をかけた。

「少し、話を聞きたい。ついてきてもらえないか？」

腕時計をはずした手首に、同じようなあざがあった。雨はもう止んでいた。

嘘じゃないです、ごめんなさい

彼は頷いた。とても気になった。

この力はなんなのか、彼らは一体、誰なのか。

「ついて言ったら、教えてもらえるわけ？」

「もちろん。仲間も紹介する。僕は神の祝福を受けた者たちなのだから」

仲間？神の祝福？

…新興宗教か何かなのだろうか？少年は間違った領域に足を踏み込んでしまったか、と頭を抱える。

神がどうの…ということは「仲間」というのは信者か何かなのだろうか？

ただ単に「神様は素晴らしいです、教えに従い生きましょう」程度だったらまだしも「神の教えは絶対！逆らうものの命を奪うことも厭わない！！」というものだったら…

宗教という仮説が、みるみる現実味を帯びていき、サーツと血の気が引く。

この疲弊しきつた体でそんな所に連れて行かれたら「ハイ。私ハ神ヲ信シマス。」と簡単に言ってしまうそうだった。

ただでさえ摩訶不思議な現象に巻き込まれ、尚且つ傍観者ではなく、自身もその仲間だと言われ…それを否定できない不思議な力を生み出してしまった。

冷静になったところで脳の処理機能は追いつかない。

先ほどの興味などとうに消え失せ、丁重にお断りをしようとした。

が、視界が揺らいだ。目の前に広がる世界がゆらりと半回転し、そのまま目線の高さは下がっていく。

驚きの表情を隠さず、慌ててこちらへ近づく少年達を見る限り、彼

らがなにかをしたというわけではなさそうだ。

ああ、これは…

心労だ、と理解する前に彼の目の前は真っ暗になった。

目が覚めると、自分の部屋だった。

意識が途切れる前の映像と著しく異なる自分の今の状況に、軽く混乱に陥った。

そして一つの結論に達する。

「夢オチか。夢オチなんか。」

エセですらないような微妙な関西弁で自分の状況にツツコミを入れる。ちなみに関西へ行ったのは中学生の時の修学旅行だけである。夢だとしたら、いきなり不思議な力に目覚め、自分よりも何杯もの大きさの化け物を倒してしまう…なんてことも有りうる。なんせ夢なのだから。

あれは夢だったのだ、と結論づけ、とりあえずベッドから起き上がると、自身が未だに制服姿であることに気いた。

確か帰り道に土砂降りに合ったはずだが…そうか、遊んでから家に帰り、制服も着替えず、そのままベッドへとダイブしたのだ、そうだ間違いない。

一旦推測が落ち着いた所で、土砂降りに巻き込まれたであろうあるものを探す。しかし、なかった。

「鞆…どこだ？」

普段なら自分の部屋までもってあがるのだが…。

きつと疲れていて玄関先に荷物を置いて部屋に戻ったのだろう。

先程から推量が多すぎて古文の授業のようになってるが、気にしてはいられない。

カバンを回収すべく、1階へ下りた。

階下に下りると、リビングに電気が付いていた。

「あら、やっと起きてきたの。」

テレビを横目で見ながら雑誌をめくっていた母親が声をかけてきた。家で一番大きいリビングの掛け時計を見ると、短針が9と10の間、長針が6と7の間にある。

食卓にはラップが掛けられた夕食が、自分の定位置にあった。

ナチュラルに腰をその前の椅子に腰を下ろす。それを見て母はご飯をお茶碗に盛りはじめる。

「遊ぶのはいいけど疲れて寝るような真似はやめてよね。」

やはり疲れて寝落ちしてしまったのか。

夕食にかけられたラップを剥がしつつ、自身の推測が（多少おかしなところもあったが）あたっていたのか、と安堵した。

「まったく、友達に家まで連れてきてもらうなんて……ちゃんと明日お礼を言っておきなさいよ。」

「……は？」

山盛りに盛られたご飯を手渡しながら呆れたように母が言った。

「あんた覚えてないの？メガネかけた男の子と、女の子二人『遊び疲れたみたいで、最後に寄ったカラオケで寝ちゃいました』なんて言って、家まで送ってくれたのよ？」

茶碗を受け取った体制から動けず、そのまま体は思考のみへと移る。遠くで「自転車まで運んでもらっちゃって……」と母は文句を言い続けている。

自分が今日遊んでいたのは、学校の友人二名。まず人数から合わない。

そして性別はもちろん男。「女の子」が登場するわけがない。もちろん友人の中に女に見えるような人物などいない。

カラオケにも行っていない。

人物だけを限定すれば、今の会話の登場人物とリンクする人々が、

頭の中に現れる。

夢だと思っていた、あいつらだ。

彼らは律儀にも、自分を家まで運んでくれたのか？

なぜ、家を知っているのか…いやもしかしたら「仲間」のうちにそういった…場所を特定するような力の持ち主がいるのかもしれない。つい3時間前まで考えていた「新興宗教」の説は彼の中でまたたく間に掠れていった。

母は怪訝そうに「どうしたの？」と尋ねてきた。

そして、彼の意識が現実に戻されたのを確認して、味噌汁を温め直すためにキッチンへと向かう。

本当に、あれは現実だったのではないか？

否定したいがしきれない、そういった心のざわめきが、脳を侵食する。

「そつだ、鞆…」

ぼそぼそと呟くと、茶碗を持っていた手をおろし、母の「どうしたのー」という声を軽く無視して玄関へ向かう。

鞆はなかった。

携帯電話は制服のポケットにいられたままだった事を思い出し、友人に、今日起こった事実を確かめようと二つ折りのそれを開く。画面は真っ暗だった。

電源ボタンをおしても付かない。顔を近づけると、すこし焦げ臭い。まるで、感電し、ショートしてしまったかのような状態で、その最後の通信手段は絶たれていた。

諦めて利き手で携帯を閉じた。その利き手の…つまり右手の人差し指には、「夢の中で見たはずの」小さなあざがあった。

おはよう、はじまるよ

とりあえず、鞆がなければ学校で困る。

彼の通う私立高校は鞆も指定品だ。値段もそこそこのので、予備な
ど持っているはずもない。

夏休み直前で荷物が多くないとはいえ、教師の目に付けば多少の説
教は免れられないだろう。

リビングに戻り、平静を装いつつ先ほど受け取ったご飯に手を付け
る。

味噌汁のお椀をもってきた母が、それを置いてから向かいの椅子に
座り、話を続けた。

「そういえば3人とも違う学校の制服だけど、どこで出会った人な
の？」

「えー…つと…」

もちろん「土砂降りの中、化け物と戦つてるところで偶然出会った
んです！」なんて言えるわけもない。

「あー…中学の時の同級生なんだ。久しぶりに遊ぶことになって、
ちよつとはしゃいじゃったんだよ」

と、一番最もらしい説明をした。中学校の卒業アルバムは自分の部
屋の中だ、すぐには気付かれまい。

「そうなの？…にしても、あんたに女の子の友達がいるなんてねえ
…？」

「うぐ…」

真正面から否定できないのが物悲しい。中学の時から女っ気もなく
野球に打ち込み、たまの休みに遊ぶのももちろん男友達だったのだ
から、母に驚かれるのは至極最もなのだが。

副菜のきゅうりのぬか漬けを口に放り込み、その場を誤魔化す。

「まああんたがどんな子と仲良くしても気にしないけどね。高校生

の夏休み楽しみなさい。」

こういう母のはっちゃけた所は嫌いではない。思春期の自分にとっては窮屈な思いがしないので有難い。

「でも、ゴムはちゃんをつけるのよ。」

ただし、一言余計だった。

あいつら彼女じゃねーよばーかばーかと罵りつつ、できるだけ早く夕飯を済ませ、自室に戻る。

普段から下ネタを親とは思えないほど大量に投入してくる母親だが、今日の精神状態ではさすがに堪えた。

愚痴でも友人に言っただろうと携帯を開き、それが既に活動を終えていることを思い出す。彼女を作るよりも先にやらなければならな
いことが山積みのようなのだ。

まず、鞆の回収。

次に携帯の修理。

携帯電話の修理ならば店に行けば（直るかどうかは置いて）なんとかしてくれるだろうが、鞆は自分で探さなければならない。

あの少年達が持ってくるのを忘れただけなら、森林公園の管理局にでも届いていそうなものだが、自転車の籠にはいつていたものだ、恐らく意図的に持っていたのだろう。

ひとまず頭の中で明日やらねばいけない事を決める。

学校には、いつもより早く向かうことにした。

終業式なので早く行っても特にすることはないのだが、生徒指導の教師が待機している所で鞆に気付かれるのは避けたかった。

今日は中学の時に使っていたメーカー製のスクールバックをとりあえず持っていくことにした。

標準的なサイズに、一般的なカラー、構造も普通で、目立ちようないものだ。高校のものは、色合いこそ似ているものの、Yシャツ

にあったものと同じく筆記体風のKの字が端に刺繍されている。
とりあえず、これでなんとかするしかない。

テスト明けの数日ですっかり夜更しの癖を付けてしまった体を宥め
つつ、早めに眠りについた。

翌朝6時。

携帯のアラームを使うようになってから殆どその役目を果たしてな
かった目覚まし時計が、何ヶ月か振りに朝を告げた。

止めるのに5秒、体を起こすのに5秒。運動部で朝練に耐えた体の
おかげで、寝起きは悪くないのだ。

とりあえず、昨日風呂に入りそびれたので風呂場に向かう。そのた
めの6時起きだ。ちなみに普段は7時。

頭を洗って体を洗って顔をあらって、ざっと15分。

リビングへ向かうと、パジャマ姿でお湯を沸かしていた母が息子の
珍しい早起きに驚いた。

今日はいつもより早く学校へ行く、と告げると、昨日聞いてないだ
の、先に行つとけだの、用意してないから大したもののは作れないだ
の言いながらもおにぎり3つと昨日の残りの味噌汁をしっかりと出
してくれた。

朝食を頬張りながらテレビを付けると、いつもの朝のニュースをや
っていた。

内容は普通。先週起きた事件の行方がどうか、国会がどうか。

その中に、昨日の森林公園でのことについてはなにもなかった。

あんなに激しい落雷（まあ一発は自分のせいだが）があつたら、停
電など何か起きていてもおかしくないはずだが。

テレビをみながらのんびりと朝食を食べて現在時刻は6時50分。
食器を下げて洗面所へ。歯を磨いてひどい寝癖はないか確認して、

55分。

部屋に鞆を取りに戻って、リビングへと一度顔を出し、「行つてきます。」と一言。母は最近ハマッっている黒酢ドリンクを片手に手を振り返した。

ローファアを掃いて家を出たのはジャスト7時だ。

自転車はいつもの場所に、鍵はついたまま置かれていた。おかしいところもない。

なんの異常も見当たらないまま、30分で学校に到着した。

昨日のように森林公園を通ったが、朝は管理局の職員が来ているか不安だったので、訪ねるのはやめておいた。

口煩い体育教員は家が近いこともあってか、教師陣の中でも来るのが遅い方だ。

テストも終わった今では早く来る生徒は部活動がある者くらい。

どこひっそりと静まり返った校内へと入り、上履きに履き替えて2階へ。一階は保健室や職員室といった特別室がメインで、普通教室は無い。

中央階段を登って右折、4教室ある中で手前から3番目、奥から2番目が彼の教室だ。

いつもの時間に来ると自転車通学を癒すオアシスのような空調設備も、今は聞いていない。きつちりと閉められた窓のせいか、どこか籠った空気を感じる。

入口横の空調のスイッチを押したが反応はない。どうやら事務室にあるメイン電源もまだ入っていないらしい。

鞆を自分の机の横にかけて、はじから窓を全開にしていく。

最後の窓を開け終わると、少しは空気が入れ代わったような気がした。汗はまだ引かないのでそのまま窓の淵に手をかけ外を眺める。

先ほど通って来た森林公園がしっかりと見えた。

それでも世界は静寂だ。

おながいします、おたがい（前書き）

結局鞆はバレることなく放課後となった。

H R が終わると、部活に行く者、帰る者、購買に昼食へ行く者などがそれぞれ教室を出て行った。

いつもの友人二人に昼食に誘われたが「雨に濡れて携帯が壊れたから修理に行く。」と言って断った。

頭に疑問符を浮かべたままの二人に簡単に挨拶を言っ
てその場を去る。

嘘は言っていない。本当に携帯は修理に行かなくてはならないし。自転車置き場を出て校門の前まで来ると、昨日見た人影があった。

おねがいします、おたがいに

結局鞆はバレることなく放課後となった。

HRが終わると、部活に行く者、帰る者、購買に昼食へ行く者などがそれぞれ教室を出て行った。

いつもの友人二人に昼食に誘われたが「雨に濡れて携帯が壊れたから修理に行く。」と言って断った。

頭に疑問符を浮かべたままの二人に簡単に挨拶を言っただけでその場を去る。

嘘は言っていない。本当に携帯は修理に行かなくてはならないし。自転車置き場を出て校門の前まで来ると、昨日見た人影があった。

間違いない、あいつだ。

昨日二人の少女が戦っている後ろにいた、瞬間移動のような不思議な動きをした、あの少年だ。

声をかける前に、向こうがこちらに気づいた。彼は少年との距離を詰める。

少年の着ていた制服は、この辺りでは最も頭の良い私立中高一貫校のものだった。

成績が全く足りないような人でも、名前と制服は分かるほど有名である。見た目真面目な少年にはなんともよく似合う制服だった。

少年の背は高めだが細身。年齢はそう違わないように見える。

「預かりもの、返すよ。」

少年の第一声はそれだった。同時に右腕をこちらに向ける。手首には昨日と同じ高機能時計だ。

「あ、俺の!」

少年が持っていたのはまさに自分の鞆だった。

「君のお母さんに渡すのは可哀想かと思つてさ。」

何を言っているんだ。こっちは教師に捕まらないために早起したり、結局筆記用具がなくて困つたりしたんだぞ。

そう思いながら鞆を開けると

「あ……」

こいつはまずい。

「ね？」

「……ありがとうございます。」

中に入っていたのはなんとアダルティな雑誌3冊だった。

昨日友人に借りたのを忘れていた。

「とりあえず、ついてきて欲しいんだけど。」

思春期特有の恩を売られてしまった身だが、簡単に着いていこうという気にはなれない。

話の途中から宗教臭いセリフが出ていたことが頭をよぎる。

警戒をとくことはできない。

「いや、鞆も返してもらつたし、こっちの用事はないんだけど……」

「じゃあちよつと無理やりにでも」

そう少年が告げると、次の瞬間にはそこらになくなっていた。

後ろから声がする。反射的に振り返つた。

「ついてきたら、鞆返すよ。」

瞬間移動した少年の手には、さきほどまで自分の手の中にあつた鞆があつた。

少年は続ける。

「それに、知りたいでしょ？それ。」

少年が指さしたのは、彼の右手。

正確には、右手の人差し指。

昨夜から突如現れた、謎のあざ。

この少年は知っているのだ。これがどうして出来たのか。あの不思議な力が一体なんなのか。

「ついてきてくれる？」

彼は…俺は、無言で頷いた。

今回はしっかりと。意識が無くなることもなく。

実はね、こんな（前書き）

承諾を確認した少年は、おもむろに俺の自転車籠に自分の鞆とさつき俺から奪い取った鞆を放り込んだ。

「荷物重いから頼んだ。」

なんのためらいもないらしい。神経質そうに見えて意外に図々しい。それにどこへ向かうのか分からないので少年を置いて先に行くこともできない。非常に悔しい。

たしかに鞆は重かった。一流進学校は扱う教材の量も違うらしい。

実はね、こんな

向かった先は以外にも近かった。

学校からの距離もちろんだが、近くの標識を見る限り家からもそう遠くなさそうだ。

たどり着いたのはごく普通のマンション。4階建てで、部屋数も中々ありそうだ。変わったところは見当たらないし、周りに住宅や公園などもある。この少年の自宅なのだろうか？

入口横の自転車置き場に自転車を置くように指示される。

少年に続いて階段をのぼった。エレベーターは無い。

「ここはみんなの集合場所みたいな感じなんだけど」

階段をのぼりながら少年は唐突に話し出す。

「いろんな人がいるから名前覚えるの大変かもね。その場にいた人は紹介する。自己紹介もその時で。」

そつえばこの少年の名前を俺は知らない。

名前も知らぬ人物に

その仲間がたくさんいる所に連れていかれる

かなり恐ろしい状況だ。

気持ちを落ち着かせるために茶化すように行ってみる。

「お前らってなんなの？宗教団体みたいなの？俺無宗教なんだけど。」

「そんなもんじゃない。」

反応は意外に冷たく、暗かった。まずい事を言ってしまっただろうか。

「ここだから。」

話を切り上げるように少年は言う。

着いたのは4階。階段から最も遠い部屋だった。部屋番号は「40

6」

少年は躊躇いなくその中に入った。
俺も続く。

中はこざつぱりとしていて、ちゃんと明るくて、靴入れの前にはまだ新しそうな花の生けられた花瓶があった。

不信感の拭えない自分が思っていた「なんか怖そうな感じ」が無く拍子抜けする。

廊下をすすんで突き当たりのドアを開けた。

「あ、源田。ちーっす…?」

「あら?どなたかしら?」

まず目に飛び込んできたのは女子二人。見覚えがある。昨日いた二人だ。

1人は黒髪ロング。もう1人は髪の毛を下方で2つ結びしている。

2人とも台がガラス製のローテーブルを挟んで向かい合わせでソファに腰掛けている。

二人とも見慣れぬ人物の姿に困惑気味だ。

「新入りみたい。」

少年：源田と呼ばれた男が答えた。

「あ、昨日のか!」

「なるほどね。」

少女二人と話をしていた源田が振り返った。

「じゃあ自己紹介する。僕は源田^{ゲンダ}隆之^{タカユキ}。年齢は16。学校は青葉

学園の高等部1年。」

学校はよく知っている。エリートだ。年齢は違うが同じ学年のようだ。ちなみに俺の誕生日は9月。

二人が続いた。

「私は刑部^{オサカベ}優映^{ユエ}。年齢は15だけど源田と学年は一緒。学校は八

汐第一高等学校。一年生。」

「金井^{カナイ}千明^{チアキ}と言います。年齢は16だけど学年は一つ上の2年生

です。柏女学院です。」

八汐はここから近い公立高校だ。俺も志望校にいられたことがある。柏は私立の女子校だということぐらいは分かるが他は知らない。なんせ女子校だから。

この三人のプロフィールを聞く限り、おかしな人物ではなさそうなので少し安心した。

自己紹介を終えた3人がこちらを見る。

「俺は三沢 ミサワ 瞬 シュン。城新高校1年生。」

言われるがままにソファに腰掛ける。女子二人が向かいに座る形に移動した。

源田が話し始める。

「で、どこから話そうか。」

「貴方たちはなんなんですかー？」

はいせんせーとも言いたげに手を上げて質問をぶつける。

「人間です」

「高校生よね」

「半死人じゃない？」

「いやいや、それ、答えになってないから。」

各々が各々の言葉で自己紹介をした。

「一つづつ確認していこう。」

源田が姿勢を整えが仕切り直した。右手の人差し指を上へ向け「一」と示す。

「まず僕たちは『普通』の『学生』です。」

普通、と学生の部分を強調した。誰からも反論はない。反応を確認して「二」と続ける。

「だから普段の生活になんら支障はない。ただ、全員不思議な力を持っている。三沢くんもね。」

「俺も…。」

「僕は三沢くんがどんな力を持っているかは分からないけど、おそらく、電撃使い…じゃないかな？」

確かに、あの時自分の指先から出たのは電撃。納得がいく。

「じゃあさ、みんなの能力ってなんなの？」

「その辺は詳しい自己紹介を含めてにしよう。」

さっきは反応を確認していたのかとも思ったが、どうやら違つらしい。

こちらの質問を無視した形で「三」、

「僕たちが、なんでこんな力が使えるようになってしまったのか。」

ここだ。

まるで突発的な病気、不意の事故。

なぜ普通の高校生にこんな力が生まれた？

「僕たちには出生、性別、年齢、今までの人生において共通点はない。…ただ、一つの点を除いて。」

普通の学生である、は共通点に含まれないらしい。

ただ、確かに自分は今まで歳相応の人生を送ってきたと思う。

勿体付けるように、言い出すのを躊躇うように、ゆっくりと源田が続ける。

「僕たちは一度、死んでいる。」

不思議な、謎な

「は？」

現代の若者らしい、それでいて間抜けな、どうしようもない返答を
してしまう。

英語で言うなら「What?」という所だ。

「そんな言い方したらこういう反応になるでしょう」

金井が呆れたようにため息混じりで言う。

源田が頭を掻く。

「そうか、それもそうだな。正確には、死にそうになった経験がある。」

前の一文でまともな訂正が来ると思って安心し、後の一文でどうも腑に落ちない気分になせられる。

この源田という男はどうも人を混乱させる遠い言い回しが好きらしい。

俺はあんまり好きじゃない。

「私たちはね、生きてきた中で『このままでは死んでしまう』って状況に遭遇しているの。」

「死にそうな…事故とか？」

「その状況は人によりけりだから…あんまり聞かない方がいいかもしれないわ。」

この金井という人物はとても簡潔で分かりやすい話し方をする。
こちら素直に「分かった。」と答えておく。

「そんな状況で私たちはそれぞれ、その危機的な状況を切り抜けるための何らかの力を入れた。」

二人に続けて先ほど刑部と自己紹介をした女が続ける。

「力、分かる？」

昨日見たそれぞれの様子を思い出す。

「えっと、金井…さんは氷？凍らせる？」

三人の中では一番正解しそうな金井の力を挙げてみる。
能力が当たるか否かの自信の無さよりも、同年代の女子をさん付けで呼ぶというなれない状況に戸惑う。

「あたり。後、言いづらいようならさん付けはいらないわ。」

「一応…年上だし。」

「私たち程度の年齢差で気遣ってたら後大変だぞ？」

刑部に入れられたツツコミに啞然とする。

もつとたくさん人がいるのか…しかも年齢差の大きな。

「とにかく、私の能力については大体正解。私の力は『物体を凍らせること』ができる」

「しかも、触れずに、な。」

源田の付け足しは無視したいところだが、確かにあの時あの化け物には触れずにいた。

「じゃあ私は？」

刑部が自分を指差し問う。

こいつは確かあの時、凍った化け物に向かって人間に有り得ない高さまで飛び、そのまま蹴りを加えていた。

「刑部は…馬鹿力。」

「そんな言い方か！…あながち間違いではないけど。」

名前の呼び捨ては先の事を踏まえて気にしないでおく。

しかし、女性相手に馬鹿力は失礼だっただろうか。

「私は、身体能力とか、皮膚の硬度、その他もろもろの体の属性を人並み外れたものにできる。馬鹿力つても間違いじゃないかな。」

皮膚の硬度もあげられるのか…確かにどんなに運動神経が良くてもあの蹴りが生み出す強い衝撃がかかったら、女子高生でなくても足が折れてしまうだろう。

残るは後一人。

源田の力がよく分からない。

一瞬で目の前から消え、次の瞬間には別の場所に移動している。
全く反応すらできない。

「源田は…瞬間移動？」

「はずれ。」

「でもまあ最初見たら瞬間移動だっと思うよねー。」

刑部も過去にそう思っていたことがあるらしい。

瞬間移動でないとしたらあれはなんなんだろうか。

「じゃあ正解を言おう。僕的能力は『時間停止』だよ。」

珍しく溜めずに、源田がはっきりと言った。

「時間停止…？」

「そう。僕の動きが瞬間移動のように見えるのは、」

そう言くと、さっきまで俺の隣に座っていた源田は次の瞬間には窓際に移動していた。

「時間を止めている間に」

次の瞬間には元いた場所に座り直していた。

「移動してるっていうだけさ。」

こう細かく動かれると、はつきり言おう、ウザい。
だが、それならあの瞬間移動にも得心が行く。

その後、源田は気恥しそうに言った。

「ただ、止められる限界は5秒間だけなんだ。」

「で、俺は…その…電撃ってこと？」

「おそらくは、ね。」

「ここで使ってもらえばいいんじゃない？」

「こら、電化製品とか変になったらどうするの。」

「あ、そっか。」

女子陣は勝手に話し合い、そして終了。

さすがに電化製品の弁償はできない。

「んじゃ、俺はあの化け物に襲われた時に力に目覚めたってわけか。」

「そう…いや、おかしい。」

源田が俺の考えを制する。

「なんか変？」

「ああ、おかしい。三沢は電撃を放ったときのことは覚えてるんだろっ？」

「はつきりと。」

そうだ。その後心労でひっくり返ったが、電撃を放ったときのこと
はしっかりと覚えてる。

自分でも驚くほどよく考えて、驚くほど冷静だった。

「初めて力が発動した時の記憶つてのをみんなもってなかったり、
あやふやだったりするんだ。」

「それは死にかけてたりしてたからじゃないの？」

「いや、そうじゃない。確かにそういう状況の人もいるが、そうじやない。」

源田の面倒な言い回しが復活する。

「僕は交通事故に遭いそうになった時にこの力が生まれたんだけど、
事故になる前に回避してるんだ。」

「つまり、5体満足で怪我もしてないから普通ならはつきり覚えて
いるはずだ、と。」

「そういうこと。」

「じゃあ俺はその前に力が生まれた可能性が高い、と。」

「そういうこと。電撃を放つていうより、電気を操れたり、それ
に耐性を持つてのが生きるために必要だったんじゃないのかと考
えるのが妥当。」

なるほど。

源田、まともに話していれば分かりやすい説明だ。まともに話して
いれば。

だとしたらいつだろうか？

電撃を放つことで回避できるようなことはあっただろうか。

小学生の時だってコンセントに鉛筆を挿すなどという危険な遊びなんてしなかったし。

原因を見つけれずにいると、がちやり、とドアの開く音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9713u/>

創造神記

2011年11月14日21時25分発行